

<論文>

過去に関する曖昧さ耐性と抑うつの 関連についての予備的検討

友野 隆成

21世紀に入ってからあと数年で20年が経過しようとしている現代社会は、20世紀末から続く混沌、不透明、不確実なものとなっている。本邦では、中々復興の進まない東日本大震災や依然収束が見えない原発事故、熊本地震や鳥取県中部地震などの東日本大震災とは異なる大規模な地震の発生、高齢化社会による年金の問題など、将来の見通しが立ちにくいさまざまな問題が発生しており、我々は常に曖昧な状況に置かれて生きているといっても過言ではないかもしれない。曖昧さは、事態の正確な予測が不可能になることで、不都合な状況からの回避やコントロールが困難になることから、一般的には不快なものであると考えられている（増田, 1998）。このことから、先行きの見えない曖昧な将来に対して不安をおぼえ、結果として抑うつを呈する者も存在することが考えられる。よって、曖昧な現代社会を生きる我々にとって、直面した曖昧さをどのように捉えるかがその個人の適応に関わる一因となってくると言えよう。

曖昧さの捉え方に関する個人差を表す構成概念として、曖昧さ耐性がある。Frenkel-Brunswik (1949)により、権威主義者は曖昧さ耐性が低いことが観察によって見出されたことに端を発し、曖昧さ耐性に関する多くの研究が行われてきた。

曖昧さ耐性研究は、当初は実験的な測定が主流であった（例えば、Martin, 1954; Millon, 1957など）が、その後質問紙によって曖昧さ耐性を測定する流れへとシフトしていった。Budner (1962)によって開発された曖昧さ耐性尺度であるThe scale of tolerance-intolerance of ambiguityを端緒とし、Rydell & Rosen (1966)によるRydell-Rosen Scale、MacDonald (1970)によるThe 20-item ambiguity tolerance test、Norton (1975)によるThe measure of ambiguity toleranceなど、さまざまな曖昧さ耐性尺度が開発された。これらの尺度は、曖昧さ耐性を“曖昧さに耐えられる—耐えられない”という一次元で捉えており、ほとんどの項目が“曖昧さに耐えられない”ことを表す内容のものであった。そして、分析の段階で得点を逆転させて曖昧さ耐性の高さを測定していた。

しかし、積極的に“曖昧さに耐えられる”ことを捉えることができる項目内容の尺度はほとんど開発されてこなかった。曖昧さ耐性の多次元性がFurnham (1994)によって示唆されたことを受け、西村 (2007)によって開発されたAttitudes towards Ambiguity Scaleの下位尺度に、

曖昧さへの肯定的態度を測定する「曖昧さの享受」と「曖昧さの受容」が見受けられる程度である。その「曖昧さの享受」と「曖昧さの受容」でさえも、元々多次元的でより広範な曖昧さへの態度を表わしている構成概念であるために、積極的に“曖昧さに耐えられる”という、曖昧さ耐性の高さのニュアンスを測定しているとまでは言えないだろう。

一方、Grenier, Barette, & Ladouceur (2005) は、「現在」と「未来」という時間軸を設定し、それぞれの時制に対応する曖昧さ耐性と不確実性耐性という2つの構成概念を提唱した。この概念化は実証データが提示されておらず、臨床場面における観察によるものという制約があったが、曖昧さ耐性に時間軸を設定して測定するというこれまでの流れにはなかった新たな視点を提供した。

これらのことを踏まえ、Tomono (2014) および友野 (2013b) は、「現在」と「未来」という2つの時間軸を仮定し、曖昧さに積極的に耐えられることを捉えた新版曖昧さ耐性尺度を開発した。上述の先行研究で作成された尺度 (Budner, 1962; Rydell & Rosen, 1966; MacDonald, 1970; Norton, 1975) や、曖昧さが生じる領域を対人場面に限定して作成された尺度 (友野・橋本, 2001, 2005a) および、曖昧さの多次元性を考慮して作成された西村 (2007) の尺度と比較して、新版曖昧さ耐性尺度は時間軸の設定があることが大きな特色となっている (Table 1 参照)。しかし、新版曖昧さ耐性尺度は時間軸の設定に関してはGrenier, et. al. (2005) の概念化のみに基づいて作成されており、もう1つの時間軸である「過去」が設定されていなかった。そのため、過去に関する曖昧さ耐性を測定可能な質問項目が新版曖昧さ耐性尺度には含まれていない。曖昧さ耐性の測定における「現在」「未来」の時間軸設定には、曖昧さ耐性と特性不安との関連に存在する性差を検出するなど一定の意義が見出されてはいるが (友野, 2013a)、「過去」の時制が設定されていないことによる重要な知見の見落としの可能性もあることも否定できない。そこで、過去に関する曖昧さ耐性尺度の開発が必要であると考えられる。

ところで、冒頭で述べたことから推察すると、曖昧さをどのように捉えるかがその後の抑うつの発生に影響を与えることが考えられる。例えば、Andersen & Schwartz (1992) は曖昧さ

Table 1 既存の曖昧さ耐性尺度の特徴

	Budner(1962); Rydell & Rosen(1966); MacDonald(1970); Norton(1975)など	友野・橋本 (2001, 2005a)	西村 (2007)	Tomono (2014); 友野 (2013b)
“耐性の高さ” の測定	なし	なし	あり (曖昧さの享受・受容)	あり
領域の限定	なし	あり (対人場面)	なし	なし
時間軸の設定	なし	なし	なし	あり (現在・未来)

耐性の低さとネガティブなライフイベントとの交互作用が、友野・橋本（2005b）は対人関係に関する曖昧さ耐性の低さと対人関係に関するネガティブなライフイベントとの交互作用が、それぞれ抑うつを予測することを示している。これらの研究では、曖昧さ耐性の低い者がネガティブなライフイベントをより多く経験した場合の、抑うつへの陥りやすさの実証という、曖昧さに耐えられないことの不適応性に主眼が置かれていた。しかし、それとは逆の視点である、ネガティブなライフイベント経験時の抑うつに対する緩衝として曖昧さ耐性の高さが機能するかどうかの議論は、相対的にほとんどなされてこなかった。さきに述べたように、曖昧さ耐性尺度の項目内容のほとんどが“曖昧さに耐えられない”ことを表す内容のものであることも、一因として挙げることができるかもしれない。そこで、積極的に“曖昧さに耐えられる”ことを測定できる尺度を用いて、曖昧さ耐性と抑うつとの関連を検討することは意義があるものと考えられる。

なお、抑うつ発症には性差の存在が示唆されている。例えば、反応スタイルに性差があるために男性よりも女性の方が抑うつに陥りやすい（Nolen-Hoeksema, 1987）ことや、本邦においても男性に比べて女性の方がうつ病の罹患率が高い（日本母性衛生学会, 2003）こと、対人関係に関する曖昧さ耐性の低さと対人関係に関するネガティブなライフイベントとの交互作用が抑うつを予測する際に、男性と女性とで交互作用のパターンが大きく異なる（友野・橋本, 2005b）ことなどが示されている。これらのことを踏まえ、友野・鹿内（2012）は、パーソナリティと抑うつとの関連を検討する際に、性差の存在を念頭に置いた分析の必要性を示唆している。

以上のことから、本研究では「過去」の時制を設定した、過去に関する曖昧さ耐性尺度を開発し、過去に関する曖昧さ耐性と抑うつとの関連についての予備的検討を行うことを目的とする。その際、性差についても併せて検討を行う。

方法

調査協力者および調査時期

調査協力者は、(株)クロス・マーケティングのリサーチ専門データベースに登録された、4年制大学あるいは短期大学に通う学生モニター計300名（男性150名、女性150名）であった。平均年齢は21.07歳、 $SD=1.52$ 歳であった。調査時期は、2016年1月下旬であった。

測度

過去に関する曖昧さ耐性 新版曖昧さ耐性尺度（Tomono, 2014; 友野, 2013b）の項目を参考にして、過去に関する曖昧さにどの程度耐えられるのかを測定可能と考えられる9項目を独自に作成した。本研究では、各項目について調査協力者が普段どの程度自分にあてはまるのか、

「まったくあてはまらない(1)」「ほとんどあてはまらない(2)」「どちらでもない(3)」「かなりあてはまる(4)」「とてもあてはまる(5)」の5件法で回答を求めた。

抑うつ Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D: Radloff, 1977) の日本語版（島・鹿野・北村・浅井, 1985）を用いた。この尺度は、全20項目（項目例：普段は何でもないことがわずらわしい。）で構成されている。本研究では、調査協力者がこの1週間に各項目についてどの程度続いていたか、「この1週間で全くないか、あったとしても1日も続かない(1)」「週のうち1~2日続く(2)」「週のうち3~4日続く(3)」「週のうち5日以上続く(4)」の4件法で回答を求め、全項目の合計得点を算出して用いた。

結果

探索的因子分析

過去に関する曖昧さ耐性を測定するために独自に作成された9項目について、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子数は、固有値の減衰状況および因子の解釈可能性を考慮して、2因子とした。そして、どちらの因子に対しても因子負荷量が、40に満たなかった2項目を除外した7項目で、再度同様の探索的因子分析を行った。その結果を、Table 2に示す。

第1因子は「過去のことで思い出せないことがある状態に、耐えることができる。」「昔の記憶が曖昧であることに、耐えることができる。」など、新版曖昧さ耐性尺度（Tomono, 2014;

Table 2 過去に関する曖昧さ耐性尺度の探索的因子分析結果

	Factor 1	Factor 2
過去の曖昧さを統制する能力		
過去のことで思い出せないことがある状態に、耐えることができる。	.823	-.066
昔の記憶が曖昧であることに、耐えることができる。	.777	-.056
昔の記憶が曖昧でも、気にならない。	.595	.073
昔の記憶が曖昧であることを、楽しめる。	.456	.320
過去の曖昧さを楽しむ能力		
もう終わったことを思い出してモヤッとしても、それを楽しむことができる。	-.195	1.009
もう終わったことを思い出してモヤッとしても、気にならない。	.201	.528
過去のことで思い出せないことがあることを、楽しむことができる。	.313	.503

因子間相関行列

	Factor 1	Factor 2
Factor 1	—	.58
Factor 2		—

友野, 2013b) の下位尺度である「曖昧さを統制する能力」に対応する項目に高い因子負荷量が表示されたことから「過去の曖昧さを統制する能力」因子と命名した。一方、第2因子は「もう終わったことを思い出してモヤッとしても、それを楽しむことができる。」「過去のことで思い出せないことがあることを、楽しむことができる。」など、第1因子同様新版曖昧さ耐性尺度の下位尺度である「曖昧さを楽しむ能力」に対応する項目に高い因子負荷量が表示されたことから「過去の曖昧さを楽しむ能力」因子と命名した。

各測度の基本統計量および性差の検討

Table 3に各測度の平均値、標準偏差、Cronbachの α 係数を、それぞれ全体および男女別に示す。全ての尺度について α 係数を算出した結果、値は.72～.82の範囲であり、全体的に概ね良好な内的整合性が示された。なお、性差を検討するために各下位尺度得点について対応のない t 検定を行ったところ、いずれの下位尺度においても有意な得点差はみられなかった。

GP分析

2つの下位尺度について、それぞれの合計得点の中央値で上位群と下位群に分け、項目ごとに対応のない t 検定によるGP分析を行った。その結果を、Table 4に示す。全ての項目で上位群の方が下位群に比べて有意に高かった ($p < .001$)。以上より、各項目の弁別性が示された。

相関分析および相関係数の有意差検定

Table 5に、各測度間の相関係数を示す。男女とも過去の曖昧さを統制する能力と抑うつとの間、および過去の曖昧さを楽しむ能力と抑うつとの間に有意な弱い負の相関 ($r = -.175 \sim -.274$) がそれぞれみられた。また、過去の曖昧さ耐性の2下位尺度と抑うつの相関係数の大きさに、それぞれ男女で有意差がみられるかどうか検討するために、相関係数の有意差検定を行った。その結果、過去の曖昧さを統制する能力と抑うつの相関係数 ($\chi^2(1) = .01, n. s.$) および、過去の曖昧さを楽しむ能力と抑うつの相関係数 ($\chi^2(1) = .62, n. s.$) にそれぞれ男女で有意差は認められなかった。

Table 3 各測度の基本統計量

	全体			男性			女性			t	d	95% CI
	M	SD	α	M	SD	α	M	SD	α			
過去の曖昧さを統制する能力	12.02	2.93	.79	11.92	2.98	.80	12.13	2.88	.78	.61	.07	-0.87 to 0.46
過去の曖昧さを楽しむ能力	8.28	2.42	.78	8.45	2.28	.72	8.11	2.55	.82	1.22	.14	-0.21 to 0.89
抑うつ	38.79	10.55	.88	38.34	10.24	.88	39.24	10.87	.89	.74	.09	-3.30 to 1.50

Table 4 過去に関する曖昧さ耐性の下位尺度ごとの GP 分析結果

	上位群		下位群		<i>t</i>	<i>d</i>	95% CI
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>			
過去の曖昧さを統制する能力							
過去のことで思い出せないことがある状態に、耐えることができる。	3.71	0.66	2.65	0.79	11.73	1.42	-1.24 to -0.88
昔の記憶が曖昧であることに、耐えることができる。	3.84	0.59	2.70	0.84	12.41	1.49	-1.33 to -0.96
昔の記憶が曖昧でも、気にならない。	3.78	0.69	2.57	0.77	13.59	1.63	-1.39 to -1.04
昔の記憶が曖昧であることを、楽しめる。	3.62	0.82	2.51	0.77	11.68	1.41	-1.30 to -1.04
過去の曖昧さを楽しむ能力							
もう終わったことを思い出してモヤッとしても、それを楽しむことができる。	3.76	0.71	2.33	0.80	14.19	1.84	-1.62 to -1.23
もう終わったことを思い出してモヤッとしても、気にならない。	3.77	0.71	2.39	0.84	13.19	1.72	-1.58 to -1.17
過去のことで思い出せないことがあることを、楽しむことができる。	3.61	0.62	2.49	0.78	11.69	1.51	-1.31 to -0.93

Table 5 各測度間の相関係数

	過去の曖昧さを統制する能力	過去の曖昧さを楽しむ能力	抑うつ
過去の曖昧さを統制する能力	—	.593***	-.187*
過去の曖昧さを楽しむ能力	.580***	—	-.187*
抑うつ	-.175*	-.274***	—

右上：男性

p*<.05 **p*<.001

左下：女性

考察

過去に関する曖昧さ耐性を測定するために作成された9項目について探索的因子分析を行った結果、新版曖昧さ耐性尺度（Tomono, 2014; 友野, 2013b）の下位尺度である「曖昧さを統制する能力」および「曖昧さを楽しむ能力」に対応する2因子が抽出された。また、2因子それぞれの内的整合性および弁別性も概ね良好であることが示された。これらのことから、曖昧さを統制する能力や楽しむ能力は、時制の違いにかかわらずある程度一貫した構成概念であることが示唆される。しかし、個々の項目の因子負荷量を見てみると、本来「過去の曖昧さを統制する能力」に高い因子負荷量を示すべき項目が「過去の曖昧さを楽しむ能力」に負荷していたり、その逆に「過去の曖昧さを楽しむ能力」に高い因子負荷量を示すべき項目が「過去の曖昧さを統制する能力」に負荷していたりしたため、項目レベルでは再検討の必要性も残されている。本研究では新版曖昧さ耐性尺度を参考に、少ない項目プールしか作成していなかったため、今後仮定された内容の因子に高い負荷量を示すような項目のみが残るように多くの項目プール

を作成しておく必要があるように思われる。

相関分析の結果、男女とも過去に関する曖昧さ耐性の2側面と抑うつとの間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。この結果は、新版曖昧さ耐性尺度 (Tomono, 2014; 友野, 2013b) を用いて抑うつとの関連を検討したTomono (2016) に沿うものであり、男女にかかわらず過去の曖昧さに耐えられることが、抑うつに対する緩衝となる可能性を示唆するものである。しかしながら、相関係数の大きさは相対的に小さいものであること、この結果が相関関係を示すのみで因果関係を示すものではないことを鑑みると、結果の解釈には慎重にならざるを得ない。また、Andersen & Schwartz (1992) では曖昧さ耐性と抑うつとの間に有意な相関が示されていなかったことから、単に曖昧さに耐えられるということだけで抑うつに陥りにくいと必ずしも言い切れないことも示唆される。Andersen & Schwartz (1992) も友野・橋本 (2005b) も、ネガティブなライフイベントとの交互作用が抑うつの増大を予測することを重要視しているため、今後過去に関する曖昧さ耐性とネガティブなライフイベントとの交互作用が抑うつの増大を予測するか検討する必要がある。

対応のないt検定の結果、過去に関する曖昧さ耐性の単純な得点差は男女間で認められなかった。この結果は、対人関係に関する曖昧さ耐性 (友野・橋本; 2005a, 2005b) において下位尺度ごとの合計得点にいずれも男女差が認められなかったことと一貫している。また、相関係数の有意差検定の結果、過去に関する曖昧さ耐性と抑うつとの間の関連の強さにも、男女間で有意な差はみられなかった。この結果は、過去に関する曖昧さ耐性と抑うつの間には男女で一貫して弱い関連しか認められないことを示唆している。以上を総括すると、本研究においては曖昧さ耐性に関する性差は示されなかったと言えよう。しかし、本研究で実施した性差の検討は、2変数までの単純な分析を行ったに過ぎない。対人関係に関する曖昧さ耐性と精神的健康の関連は性別によって大きく異なり、極めて複雑である (友野, 2017) ことを敷衍すると、3変数以上を扱う多変量解析を行うようなモデルに過去の曖昧さ耐性と抑うつおよび関連する調節変数や媒介変数を位置づけることで、はじめて性差が生じるようになるのかもしれない。

最後に、これまでに挙げられたこと以外の課題を述べる。本研究は、4年制大学あるいは短期大学に通う学生を調査協力者としたが、全員がweb調査会社に登録しているモニターであった。このことから、本研究の結果がサンプルの偏りによって得られたものである可能性を完全に除外できない。また、本研究で作成された過去に関する曖昧さ耐性尺度の項目は、時制を更に細分化せずに、漠然と「過去」という表現を用いていた。調査協力者にとっては、数分前も数十年前も同様に過去であるが、その意味合いは大きく異なってくるものと思われる。さらにそのことに関連して、本研究の調査協力者の年齢層は20歳代であったが、他の年齢層でも本研究で得られた結果と同様であるかは不明である。数分前の過去はどの年齢層でも大差ないかもしれないが、数十年前の過去は年齢層によって意味合いが変わってくる可能性が考えられる。

これらのことを踏まえると、「過去」の時制を「近い過去」と「遠い過去」に細分化して、それぞれの時制で発生した曖昧さにどの程度耐えられるかを測定できる尺度を開発し、抑うつとの関連をさまざまな年齢層で検証する必要がある。本研究は、そのための予備的検討として位置づけられるので、今後本研究で得られた知見を拡張させていくことが望まれる。

引用文献

- Andersen, S. M., & Schwartz, A. H. (1992). Intolerance of ambiguity and depression: A cognitive vulnerability factor linked to hopelessness. *Social Cognition, 10*, 271-298.
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality, 30*, 29-50.
- Frenkel-Brunswik, E. (1949). Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality, 18*, 108-143.
- Furnham, A. (1994). A content, correlational and factor analytic study of four tolerance of ambiguity questionnaires. *Personality and Individual Differences, 16*, 403-410.
- Grenier, S., Barette, A. M., & Ladouceur, R. (2005). Intolerance of Uncertainty and Intolerance of Ambiguity: Similarities and differences. *Personality and Individual Differences, 39*, 593-600.
- MacDonald, A. P. (1970). Revised scale for ambiguity tolerance: Reliability and validity. *Psychological Reports, 26*, 791-798.
- Martin, B. (1954). Intolerance of ambiguity in interpersonal and perceptual behavior. *Journal of Personality, 22*, 499-503.
- 増田 真也 (1998). 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), *47*, 151-163.
- Millon, T. (1957). Authoritarianism, intolerance of ambiguity, and rigidity under ego and task-involving conditions. *Journal of Abnormal and Social Psychology, 55*, 29-33.
- 日本母性衛生学会 (2003). ウィメンズヘルズ辞典—女性のからだところガイド— 中央法規出版株式会社
- 西村 佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して— パーソナリティ研究, *15*, 183-194.
- Nolen-Hoeksema, S. (1987). Sex differences in unipolar depression: Evidence and theory. *Psychological Bulletin, 101*, 259-282.
- Norton, R. W. (1975). Measurement of ambiguity tolerance. *Journal of Personality Assessment, 39*, 607-619.
- Radloff, L. S. (1977). The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement, 1*, 385-401.
- Rydell, S. T., & Rosen, E. (1966). Measurement and some correlates of need-cognition. *Psychological Reports, 19*, 139-165.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, *27*, 717-723.
- 友野 隆成 (2013a). 曖昧さ耐性の時間軸設定の意義に関する検討 日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集, 165.
- 友野 隆成 (2013b). 新版曖昧さ耐性尺度の妥当性の検討 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 296.
- 友野 隆成 (2017). あいまいさへの非寛容と精神的健康の心理学 ナカニシヤ出版
- Tomono, T. (2014). A pilot study on developing a new ambiguity tolerance scale. *Personality and Individual Differences, 60*, Supplement, S48.
- Tomono, T. (2016). Is ambiguity tolerance an important factor that can distinguish between depression and

anxiety? *International Journal of Psychology*, 51, Supplement S1, 913.

友野 隆成・橋本 幸 (2001). 対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み 同志社心理, 48, 1-10.

友野 隆成・橋本 幸 (2005a). 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み パーソナリティ研究, 13, 220-230.

友野 隆成・橋本 幸 (2005b). 抑うつ の素質ーストレス・モデルにおける性差の検討: 対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として 健康心理学研究, 18, 16-24.

友野 隆成・鹿内 美冴 (2012). 曖昧さに対するパーソナリティ特性と抑うつ の関連性 宮城学院女子大学研究論文集, 115, 55-65.

謝辞

本研究は、2015年度宮城学院女子大学特別研究助成「特別研究費」の助成を受けた。本研究の実施に当たり、調査にご協力いただいた皆様に、深謝申し上げます。

(2017年4月11日受領、2017年5月31日受理)

(Received April 11, 2017; Accepted May 31, 2017)

The preliminary examination of the relationship between tolerance of the past ambiguity and depression.

Takanari TOMONO

The present study had two purposes. One was to develop a scale which could assess tolerance of ambiguity associated with the past. The other was to examine whether this tolerance of past ambiguity was correlated with depression and whether gender differences existed in this relationship. Participants were 300 college or junior college students (150 men, 150 women) who completed the questionnaire with tolerance past ambiguity items which were created by referring to previous studies and the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale. Two factors extracted in an exploratory factor analysis of the items included “the ability to control past ambiguity” and “the ability to enjoy past ambiguity”. In addition, each subscale’s internal consistency was sufficiently high and each item had sufficient discriminability. Correlation analyses showed that tolerance of past ambiguity was negatively correlated with depression. However, regarding the difference between tolerance of past ambiguity and depression, there were no significant gender differences. These results suggest that factor structure of tolerance of past ambiguity was consistent with New Ambiguity Tolerance Scale. Future detailed studies should explore about multiple relationships among tolerance of past ambiguity, depression, and other moderator/mediator variables.